

ふつうって? ~子どもの発達と向き合う

⑤ 友達トラブル

「今日、教室でおしっこを漏らしてしまって...」。岡山県南の小学校に通う雄馬さん(10)＝仮名、自閉スペクトラム症(ASD)、注意欠如多動症(ADHD)＝の母親は、雄馬さんが3年生の時、担任教諭からの電話に耳を疑った。1年生からこれまで、そんなことは一度もなかった。いったい何が。母親が事情を尋ねると「一つ上の学年のお兄ちゃんに、やれって言われた」と雄馬さんは泣きながら打ち明けた。以前から同じ子に「ばか」「出て行け」と言われ、たたかれたこともあったという。

行き違い

子どもが小学生になると、交友関係が広がり、複雑化していく。中でも発達障害やグレーゾーンの子どもらは、コミュニケーションの苦手さや衝動性から友人とトラブルになりやすい。

要因や内容は発達障害の種類や特性によって異なる。例えば、ADHDの子どもは早とちりしがちで、友達の発言の真意を誤解して強く言い返してしまうことがある。約束を忘れたり、借りた物をなくしたりすることも。他者の気持ちを想像するのが苦手なASDの子どもは、身体的特徴など、相手が

触れてほしくないことを口にして怒らせてしまうことがよくある。

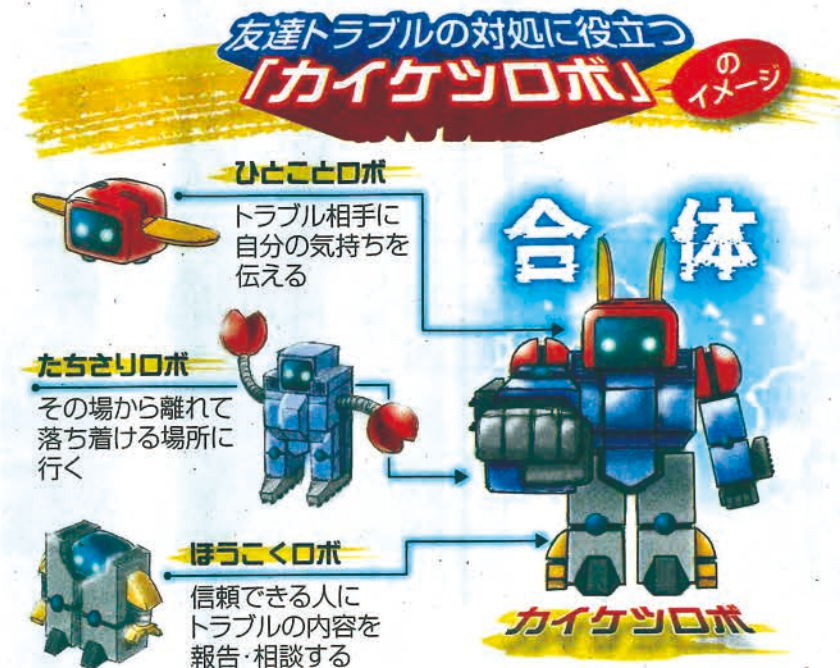
ちょっとした悪ふざけや行き違いが、いじめや不登校に発展することも。雄馬さんのケースでは、学校側は2人のトラブルを把握していなかった。母親は「話を聞くようにしていたけれど気付けなかった。『やり返したら駄目』と教えていたから、我慢していたのかも」と声を落とした。

得意技

発達障害のあるなしに関わらず、トラブルは予期せず起こる。元香川大教授(特別支援教育)でNPO法人岡山県自閉症児を育てる会(赤磐市)の相談支援専門員・武蔵博文さん(68)は「子どもでも行える対処法を身に付けておくのがいい」と勧める。

1月、同市であった育てる会主催の勉強会で武蔵さんは、子どもにも伝えやすいよう3種類のロボットのイラストを使って解説した。相手に自分の気持ちを伝える▽その場を離れて落ち着ける場所に行く▽信頼できる人にトラブルの内容を報告・相談する―という3点をそれぞれのロボットの得意技として紹介。さらに「3体を合体させることでより確実な対処

対処法考え 親子で練習を



に2人の人間を描き、本人と相手の発言や思いを吹き出しに書いて視覚化し、状況を整理すると理解しやすい。根底にある要因を一つ一つ教えることが「社会生活を送る上での勉強になる」という。

雄馬さんはその後、相手が「これまでのことごめん」と謝ってきたので、それを受け入れた。今では一緒にバスケットボールや将棋を楽しむ仲になり、母親も胸をなで下ろしている。

(小若菜美)

法になる。まずはどれか一つでもやってみて」と呼びかけた。

実践に向けては、多様な状況を想定してどんな言葉を選べばいいか考えたり、立ち去る場所やトラブルを報告する相手を決めたり、その人物に了承を得たりしておくことの「事前準備」の大切さも説いた。「トラブル対応のやりとりをシナリオにし、親子で練習しておくのも効果的」という。

納得できる説明

実際に、トラブルが起きてしまったら?

川崎医療福祉大の重松孝治講師(自閉症支援)は「子どもになぜそんな言動をしたのかを聞き取り、誤解している部分について納得できる説明をするのが大事」と力を込める。その際、紙